

## 「ベトザタ」の池で

## 詩編 23 編 6 節

## ヨハネによる福音書第 5 章 1～9 節

ユダヤ人の祭りがありまして、イエス様はエルサレムに上られました。

その祭りがどのような祭りであるかは、分かりませんが、イエス様はユダヤ人の伝統に従い、エルサレム神殿にのぼられました。ユダヤでは 3 大祭りがあって、そのときは成人男性はエルサレム神殿で、礼拝を守らなければならない義務がありました。「年に三度、男子はすべて、神の御前に出ねばならない。」(出 23:17)

そのエルサレム神殿の北のほうの角に、聖書には羊の門の傍らにと、書いてあります。そこに、ヘブライ語で「ベトザタ」と呼ばれる池があったようです。その「ベトザタ」という言葉の意味は、「慈しみの家」という意味であるようです。そこには五つの回廊があって、そこには、様々な病気や障害を持っている人たちが大勢横たわっていました。

その池はどのような理由からかはわかりませんが、時々水が動くときがありました。ある聖書神学者は池のそこには地下水が流れていて、その流れが泡だって、池の水を動いていたといいます。当時の人々は、それは天からの天使が水を動かして、そのとき一番、最初に入った人はどのような病気があっても癒されるという話を信じていました。それで、多くの人が癒しを求め、弱っている体を横にして水が動くのを待っていたのです。多分そこにいる人たちは、医者が治すことができないくらい深刻な病気か、貧困で医者に行くこともできないくらい惨めな生活の中にいた人たちだと思います。体の痛み、苦しみが彼らの精神、生活すべてを虜にしている状態です。1 日中、池の水だけを見て過ごす、それ以外には考えられない状態です。

想像してみてくださいひどい病気と障害を持っている人たちが大勢に集まって池ばかり見張っている。病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが大勢に横たわって、そして、池の水だけに視線が固定されている。そして、誰よりも早く入らなければならない、それだけに集中して日々を過ごしている。それはいかに彼らの問題が深刻であるかをもの語っています。大勢の人が一緒にいながらも隣人ではない、他人は私の道の邪魔者にすぎないのです。

イエス様はそのような人たちのところに入りました。わたしなら、皆さんならどのようにするでしょうか。たぶん、そこを見なかったふりをして他に道に向ったかもしれない。ある人はこのように言うかもしれません。そこに入る特別な理由もないし、それはその人たちがいやで、無視する気持があるからではありません。健康な私がそこに行くのは、かえって迷惑だから。その惨めなところ、苦痛の固まりのところから目をそらしたい、私とは関係ないことのようにしよう、という思いがあるのは正直な気持でしょう。しかし、イエス様は敢えてそこに行きました。そして、一人を見ました。大勢の人の中でイエス様は彼を見たのです。イエス様が見たということは、知るということです。イエス様は彼が長年の病気で絶望の中にいるのを知りました。イエス様は彼に言われます。「よくなりたいか」。これはある面、とても失礼な質問のように思われるところがあります。「見て分からないのか」「それはあたりまえなことでしょう」と陰悪な答えが返ってくるかもしれません。しかし、この人はイエス様が勝手にはできない権威ある方であることを、何とか感じていたようです。主よ、とイエス様を呼んでいます。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。私が行くうちに、他の人が先に降りて行くのです」と答えました。普通なら、「よくなりたいか」といわれたら、「はい、よくなりたいです」という言葉が先に

出るはずですが。しかし、彼は、どうしようもない自分の状態を身の上話のように訴えているのです。誰もわたしを助けてくれない、他の人が先に行ってしまう、すべての人に絶望しています。隣人さえ、敵のような存在です。癒しを求める池を1日中見ながら、それは希望ではなく絶望です。そうなのにそこにいる。そこにいるしかない、その惨めなところに安住し、運命のように受け入れて生きているのです。

38年、十分長い時間を病気で苦しんでいた。その人の周りには家族も友達も共にいない一人ぼっちになってしまったのです。奇跡の池の側にいながらも、それは自分とは関係がない、希望も期待もできない、ただいるということだけの生活なのです。池ぎわによこたわっている、このことほかには考えられない、また、考えたくもない、その無気力になれてしまった人間の、自己弁明に過ぎないのです。ベトザタという慈しみの場所は彼にとって、呪いと絶望の場所になっていたのです。

わたしがこのようにただ横たわっているのもしょうがないのです、助けてくれる人がない、いかに、非情なこの世でしょう、わたしはすべての人に捨てられているのですよ、と訴えたかったかもしれませんが。あるいは、自分の不幸に神様が冷酷だと呻きながら、神様に祈ることさえ諦めて、絶望していたかもしれません。この人は、病気が治ることを放棄し、その現実に溺れ、無力な人間になってしまいました。イエス様は彼のそのすべてを見抜きました。知っておられました。主が知っておられる、それは恵みです、希望です。

主は彼に言われました。「よくなりたいたのか」。イエス様はその人の深い問題を見たのです。「本当に、真心からよくなりたいたと思うのか。良くなるのだという確信をもっているのか」ということでしょうか。その絶望に安住してしまっている彼の心を破っているのです。心の底から今の状態から解放されたいという願いがなければ何にも起こらないのです。慣れ親しんでいる絶望の状態から目を覚まさなければならぬのです。

イエス様は言われました。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」38年も横たわって、起きているより、横たわっているほうが楽に感じられるこの人に、起き上がりなさい、とおっしゃいました。全身が弱って心も身もくたくたになっている、そのような人にイエス様は自ら起き上がりなさい、それも床を担いで歩くように命じておられるのです。

イエス様は骨しか残っていないような弱いその人に手を置くとか、そのまま命じて癒したりして下さらなかつたのです。起き上がりなさい、それだけではなく、治ったら投げたてしまいたくなる、一番捨てたくなる、その病の痕跡である床を担いで歩きなさい、とおっしゃっているのです。人間は自分の過去や痛みの奴隷になってはいけません、その結果を背負って歩かなければならないことがあるのです。14節を見るとその人の病気は罪によるのが分かります。イエス様はその人の病気を治すだけではなく、その罪ある人生の苦しみを忘れず、主の証人として歩むことを望んでおられたのです。「床を担いであるきなさい」それは、その人の体の癒しだけではなく、彼の人生の回復でもあります。主によって救われた私たちは各々の十字架を背負って主に従う、主とともに歩く人生になるのです。

私たちは辛い現実を嘆きながらも、その苦しみに溺れてしまい、そこから出ようという気持さえ失ってしまうときもあります。いつの間にかその絶望の現実に慣れてしまい、そのとりこになってしまうのです。その現実に妥協し、安住しようとする傾向があるのです。

しかし、そのような人に向って「起き上がりなさい、床を担いで歩きなさい。」とイエス様はおっしゃるのです。私の言葉を信じて全身の力を搾り出し、一方踏みだしなさい、という命令、勧告があります。人間は自分の痛みや問題の奴隷になってはいけません。私たちのために十字架で死んで下さった主イエスは、勇気を出しなさい、私は死に打ち勝ち、復活した。わたしを信じ従う人には、死のような暗闇に打ち勝つ復活の力が与えられる。だから起き上がりなさい、とおっしゃっておられるのです。その主のお言葉に従った彼は癒されました。

イエス様はそのことがきっかけになって、ユダヤ人たちに憎まれるのです。その日は安息日でありました。人が苦しみから開放されたのを見ても共に喜ぶことができない、慈しみと愛がない人々の話が後に出てきます。18節を見ると、彼を癒した故に、ユダヤ人たちはますますイエス様を殺そうと狙うようになりました。彼は、最初は自分を治した方が誰であるかも分からなかったですが、再びイエス様に出会ってから、自分を癒したのはイエスだとユダヤ人たちに知らせます。自分の身の安全のために自分の救い主を告発する人間の弱さが描かれています。しかし、主のみ手に触れられ、癒された彼の人生は以前の彼ではないと思うのです。

では、よく考えて見ましょう。池ぎわにいた人々それは私たちの姿ではないでしょうか。病気の人、目が見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人が大勢集まって、自分の生きる道しか考えられない世界、それはわたしたちのせかいではないでしょうか。見ても見えない、聞いても聞けない、目に見えるものに救いを求めながらも虚無に屈している世界、そして、自分だけがどうか生き残ろうとしている世界、救いを求めながらも救いがいい私たちの世界に主は来られました。この罪だらけの人間の世界に神ご自身が来られたのです。自分の罪によって、お互いが憎しみ、傷つき合い、殺し合う、それで、呻き苦しんでいる我々の混沌と絶望の世界に主イエスが来られたのです。そして、患う人の中から一人の病人に目を留めたように、大勢の人の中でこの私を見つめ、呼んでくださったのです。そして、私を癒し、救ってくださるために十字架で死んで下さったのです。主は言われます。「信じなさい、そしてあなたの十字架を背負って私に従いなさい。」

池ぎわに横たわって絶望の日々を送っていた彼のように、自分の弱さ、罪、自分の過去に捕らわれている私のために、主は十字架で死んでくださったのです。そして、三日目に復活なさいました。死にも打ち勝った方が命じます。「起き上がりなさい、そして、床を担いで歩きなさい。」辛かった過去は主によって益となり、私の病は主によって信仰の証になるのです。ですから、私たちは喜びを持って告白できるのです。

「命のある限り、恵みと慈しみはいつも私を追う。主の家に私は帰り、生涯、そこにとどまるであろう。」まことのベトザタ、慈しみの家が私たちにはあるのです。